

2005年1月、アメリカ・ニューヨークの Asia Society Museum(アジア ソサエティー美術館)で開催された展覧会を見学する機会を得た。アジア社会の「遊びの文化」の中で遊戯が果たす役割を探求する大規模な展示としては初めての企画で、最新の研究成果に基づいた展示品が集められた。New York Times 紙は同展の特集記事を掲載し、ワシントン DC の Arthur M. Sackler Gallery でも巡回展が催され、関心の高さを窺わせた。

展示は文化活動としての遊戯の重要な役割を理解するために、特に知力を競う碁と将棋や双六などダイス(さいころ)の目の偶然性によってコマを進める遊戯、ポロなどボールを用いる遊戯など4つのテーマに分けられていた。

展示を企画し、アジア遊戯史に精通しておられる同美術館准館長兼学芸員の Colin Mackenzie(コリン・マッケンジー)博士(中国美術史)から次のような教示を受けた。

「双六は、最近の研究で古代エジプトの遊戯『セネット』にその起源が求められ、その伝播の過程で様々な遊戯方法がうまれた。ヨーロッパへ伝わった遊戯はバックギャモンとなり、東方には中国から日本にまで伝わり双六となった。双六は世界の遊戯史を理解する上で大変重要な遊戯の一つである。その伝播途中の中近東やインド、東南アジア、中国でもそれぞれ伝わった地域で独自の盤やルールが発展した。日本の双六盤は、中国に伝わる双六盤と酷似している。」

中近東やインド、東南アジアの展示品を実見するとヨーロッパに伝わったバックギャモンに近い形態を取るが中国やモンゴルは日本の双六に近い形態を取る。

2001年に確認された富山市水橋金広・中馬場遺跡出土の双六盤が、今回の展示会図録に写真・解説付きで紹介された。

双六盤は正倉院などの伝世品以外は絵画資料でしか見ることができず、厚板状の完全な形で遺跡から出土した例は同遺跡が日本国内では初めてである。この点についてもアジアの遊戯史的視点からの資料として評価が高い。

同遺跡の安土桃山時代(16世紀後半)の遺構から出土したもので、通常、厚板状の形状をとることから、双六盤として利用された後は加工・転用されるため、盤として遺跡に残る極めて珍しい例であることを博士に話した。

博士によると、日本に伝播した遊戯は、盤・ルールともに大きく発展・進化したものが多く、将棋はコマの動かし方を見ても中国の将棋に比べ格段に複雑化している。

中世以前の日本の盤双六については5種類ほどのルールが推定されている。さいころの出た目の偶然性からコマを進めるゲームで庶民にも広く浸透し、近世以降はその賭博性からか禁止令が出され衰退し、絵双六のみが残っている。同遺跡の双六盤は、実際の使用痕跡があり、調度品として伝世された双六盤とも異なる。実用品として盤上遊戯史研究上極めて貴重な例であると遊戯史学会会長増川宏一氏からも高い評価を受けている。

このように、本市出土の双六盤がアジアや世界の視点でも遊戯史上非常に重要な意義があることが判明してきた。今回の展示を見学し、本市出土双六盤について考察を深めることができ、大変有意義であった。



Colin Mackenzie 博士と Asia Society で